

I 研究計画

目指す子供の姿

推測や修正を加えながら，他者に配慮したコミュニケーションを図ることができる

外国語活動・外国語科における納得解を導く姿を「推測や修正を加えながら，他者に配慮したコミュニケーションを図ることができる」と設定し，研究に当たる。

1 目指す子供の姿について

「推測や修正を加えながら」とは、「この表現で伝わるだろう」、「相手の言っていることはこういうことだろう」と推測しながら話したり聞いたりすることである。また，円滑にコミュニケーションが行われない場合などに，修正を加えて自身の考えや言葉を再構築し，よりよいコミュニケーションを試みることである。

「他者に配慮しながらコミュニケーションを図る」とは，他者を尊重しながら気持ちや考えを伝え合う活動を通して，他者との心地よい距離感を発見し，思いや考えを共有したり多様な価値観を受け入れたりすることである。その際，ジェスチャーや表情などの非言語もコミュニケーションの重要な要素であることを理解し，必要に応じて言葉と組み合わせて用いることができるようにする。

2 これまでの取組について

目指す子供の姿に迫るために，1年次は「既得の知識や経験を基に言葉を選択し，他者に配慮しながらコミュニケーションを図り，互いの差異を擦り合わせて理解し合おうとする」とし，「実生活に即した活動場面の設定」と「発達段階に即した語彙の選定とスケール化・図式化」を研究内容として進めてきた。

成果は，外国語教材をそのまま用いるのではなく，実態に応じてより実生活に即した活動場面を設定したり，抽象的な語をスケール化・図式化したりすることで，子供同士のコミュニケーションを促進したり，子供が使用する語彙を増やしたりすることができたことである。また，相手の話に反応しながら聞いたり敬語表現を用いたりしながら，他者に配慮したコミュニケーションができるようになってきたことである。

課題は，以下の3点である。

- ①より活発なコミュニケーションを目指すと，場面や語彙が限定され，子供が本当に伝えたいことが伝えられない。
- ②子供にとってコミュニケーションの目的意識や必要感が不十分である。
- ③子供の主体的な活動が少ない。

3 研究内容

目指す子供の姿に迫るために、2年次は研究内容として以下の2点に取り組む。

(1) 主体的な学びにつなげる場面の設定と語彙の選定

実際の生活場面、子供の興味・関心や社会に関する知識を基にした場面の設定と、子供が伝えられること（既習表現）に伝えたいことを加味した語彙の選定が重要である。それにより、子供が主体的に知識や既習を想起し、推測しながら考えや言葉を構築することが可能になる。その際、敬語表現や相手の話に反応する表現を取り入れたり、ジェスチャーや表情などの非言語的な要素も意識させたりすることで、伝え合うことを目的とした他者に配慮したコミュニケーションにつなげる。

(2) 自己の改善点を見出し、修正を加えながら活動することができる振り返り

活動の途中と授業の終わりに振り返りを行う。中間振り返りを行うことで、子供は、課題を発見したり進捗状況を確認したりすることができる。中間振り返り後、自身の考えや言葉に修正を加えて再構築させるために、グループや全体で課題解決に向けたアイデアを共有させたり、再度じっくり課題に向かわせたりする。授業後の振り返りでは、考えや言葉の変容に着目させ、自身の学びに気付かせるとともに、次時への見通しにつなげる。

4 検証方法について

- (1) 活動場面の設定と語彙の選定の適否について子供による評価カードの記述を基に分析する。
- (2) 授業記録をもとに子供の発話量や内容を分析する。

(田中 久絵)

II 研究実践及び考察

【実践例① 授業者：田中 久絵 Sean Patton 対象：6学年3組】

1 単元名 This is me! (『Here We Go!⑥』Unit1)

2 単元の目標

自分のことを知ってもらったり相手のことをより分かったりするために、出身地や得意なことなど、自己紹介に関することについて具体的な情報を聞き取ったり、伝えようとする内容を整理した上で、話したりすることができる。また、自己紹介に関することについて、例文を参考に、音声で充分慣れ親しんだ語句や表現を用いて書くことができる。

3 目指す子供の姿に向けて

子供の実態

- ・ 明るく活発な子供が多く、意欲的に学習に取り組むが、英語や既習事項を使用することに意識が向き、他者へ配慮したコミュニケーションをするまでには至っていない。
- ・ 母語でも話すことに苦手意識があり発話につながらない子供、自分の考えをもつことができない子供がいる。
- ・ じっくり考えたり他者と交流したりしながら自分の考えを広げたり深めたりすることに課題がある。

単元で育てたい資質・能力

- ・ 表現方法や表現内容を修正しながらよりよいものを作りあげていこうとする態度。

単元について

- ・子供は、これまで好きなものや欲しいものを伝えながら自己紹介をする経験をしている。6年生では、既習に新出表現を加えて学級の仲間に自己紹介する活動を設定し、4～5文程度の自己紹介ができるようにすることを旨とする。その際、コミュニケーションに必要感をもたせるために、学級の仲間をより深く知ることが目的とし、自分の意外な一面を知らせることを条件に加える。
- ・新出表現は、出身地を伝える I' m from～. 得意なことを伝える I' m good at～. である。自己紹介をする目的・場面・状況に応じてこれらの表現を自分の自己紹介に加えることができるようにする。

手立て

- ・レベルアップの仕方について具体的にイメージさせる場面
- ・レベルアップのポイントをもとに改善点を考え、自己紹介メモを修正する場面

単元で目指す子供の姿

- ・自分が伝えたい情報を相手にわかりやすく伝えようと工夫したり、相手の言いたいことを理解しようとしたりする子供

単元で育む見方・考え方の表現内容を修正していくための自己の改善点を見出し、複数の事柄を関連付けてスピーチを構成すること。

4 授業の実際

(1) 本時の目標

よりよい自己紹介にするために、改善点を見出し、内容を修正しながら活動しようとする。

(2) 授業の概要

- 1 挨拶をする。
- 2 自己紹介で用いる表現を復習する。
- 3 学習課題を確認する。
自己紹介スピーチをレベルアップさせよう。
- 4 自己紹介例を提示し、よりよい自己紹介に修正するためのポイントを考える。
- 5 スピーチ例を修正し、レベルアップの具体的内容をイメージさせる。
レベルアップの仕方について具体的にイメージさせる場面
- 6 グループで改善ポイントを考えてスピーチ練習をする場面
レベルアップのポイントをもとに改善を考え、自己紹介メモを修正する場面
- 7 アイディアや課題を全体で共有する。
- 8 振り返りをする。
- 9 挨拶をする。

評価：よりよい自己紹介にするために改善点を見出し、内容を修正しながら活動しようとしている。

5 授業の考察 (C: 子供 T1: HRT T2: ALT)

レベルアップの仕方について具体的にイメージさせる場面

〈子供に提示した自己紹介例〉

Hello. My name is Hinata.

T2: 自己紹介例の音読

① I'm from Hirosaki.

T1: よりよい自己紹介にするためには、どこを修正すればよいですか。

② My birthday is October 20th.

C1: 内容がバラバラだ伝わりづらい

③ I'm good at history.

C2: 1つのことを詳しく説明すればよい。

④ I can play tennis.

*本単元におけるよりよい自己紹介とは、学級の仲間に自分のことをよりよく知ってもらうための自己紹介である。

⑤ I have tennis class on Saturday.

⑥ I like cats.

⑦ My favorite fruit is apples.

⑧ I want to go to Tokyo.

Thank you.

〈子供のワークシートから〉

- ・自分が挙げたことについて、理由や説明などを付け加えるとわかりやすくなることがわかった。
- ・たくさん言うと、伝わりにくくなることがわかった
- ・レベルアップのポイントは深く伝えることだと思う。

レベルアップのPOINTをもとに改善点を考え、自己紹介メモを修正させる場面

〈子供のワークシートから〉

- ・最初は短かったけど、1つのことについて詳しく書くことができた。
- ・順序や内容を適切に考えることができた。
- ・メモを修正したけれど、具体的にどう言えばいいか難しかった。
- ・その英語が難しく相手に伝えられないことがあったので、もう少し簡単な英語に変えて相手に伝えられるようにしたい。

〈単元の目標を達成したスピーチ〉

修正前

Hello. My name is ~.

①My birthday is ~.

②I'm good at collecting stuffed frogs.

③I'm good at table tennis.

Thank you.

修正後

Hello. My name is ~.

①I like frogs.

②I don't like snakes.

③I'm good at collecting stuffed frogs.

④I'm good at table tennis.

⑤I want to go to a rice field.

Thank you.

複数の事柄を関連付けて話すことに意識を向けさせることを意図し、上記の自己紹介例を提示したところ、「1つのことについて詳しく説明すればよい」ことを全体で確認することができた。しかし、自己紹介例のどの部分をどのように広げていけばよいか発言した子供は少なく、レベルアップの仕方について具体的にイメージさせるまでには至らなかった。この段階で、どのように修正していけばよいか具体例を数多く示し、修正前後のスピーチを比較してスピーチのレベルアップを実感させる必要があったと考える。

子供の振り返りカードから、「1つのことについて詳しく説明すればよい」という修正のポイントを理解したことがうかがえた。しかし、実際に自分のスピーチメモを修正する段階で、どう修正すればよいか迷っていた子供が多かった。上述のように、提案1において自己紹介例を用いて具体的にどう修正していけばよいか考えさせることで、子供が自身のスピーチメモにおいても修正する内容を焦点化するヒントとすることができたのではないかと考える。提案1のレベルアップの仕方について具体的にイメージさせる場面において、修正する部分を例文全体ではなく、本単元のターゲットフレーズである **I'm good at history.**にしてもよかった。それにより、子供がどこを考えればよいか明確になり、複数の事柄を関連付けることに焦点を当てることができる。

6 本実践の成果と課題

(1) 成果

話すことにおいて、子供の意識を技能面だけでなく内容面にも向けさせることができたことである。本実践を通して、子供は、相手により伝わりやすくなる工夫として、理由や説明を加え、複数の事柄を関連付けて話すなど、発表の内容にも着目すればよいことを理解した。今後も、話すことにおける技能、内容、適切な英語使用の指導のバランスに配慮しながら、子供の力を総合的に高めていきたい。

(2) 課題

自分の伝えたいことを自分の知っている表現に置き換える力の育成である。本実践でも、複数の事柄を関連付けてメモは作成したものの、自分が伝えたいことを簡単な表現に置き換

えていく段階で多くのつまづきが見られた。その結果、単元最後のスピーチが難しい表現になり、自分が話すことも相手に聞いて理解してもらうことも難しくなったケースが見られた。そのため、今後は以下の点に重点を置く。また、

- ・既習事項を常に想起させる手立てを工夫する。
- ・インプットした言葉をアウトプットさせる機会を増やして子供が使用できる語彙を増やす。
- ・1つの物事に対してイメージを膨らませ、いろいろな言葉で表現させる。

【実践例② 授業者：吉谷 瑞穂 Sean Patton 対象：3学年3組】

1 単元名 「This is for you.」

2 単元の目標

- (1) 日本語と英語の音声の違いに気付き、形や色、数などの言い方や、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
- (2) 欲しいものを尋ねたり答えたりして伝えあう。
- (3) 相手に伝わるように工夫しながら、自分の作品を紹介しようとする。

3 目指す子供を育てるために

子供の実態

- ・外国語活動への取組状況は意欲的で、ALTに進んで話し掛ける子も数名存在する。
- ・年度当初と比較すると、英語でやり取りすることへの抵抗感は軽減しつつある。
- ・学習には意欲的だが、事柄によっては言葉と事物が結び付いていないことがあり、英語で表現することへの障壁となっている子供がいる。

(つまづきの例) T1:HRT T2:ALT S:子供

T1: Do you like cabbages?

S1: (キャベツって何だっけ?) ※¹

T2: (野菜だよ)

S3: (どんなの?) ※²

T2: (千切りとかでサラダに入ってる)

S1: Yes, I do.

※¹言葉としては聞いたことがあるものの、イメージが即座に浮かばない。

※²野菜というヒントで何となくイメージできたものの、他の野菜と混同している等の理由で「キャベツ」を確定できずにいる。

尋ねられたもののカテゴリーやそのものについての既得知識がないか、あるいは経験不足のために、もののイメージや実体が掴めないと考えられる。そこで、母語・外国語に限らず言葉の理解を苦手としている子供のために、カテゴリーや属性などとともに言語材料を提示しながら、意図的に言語指導をしていく必要がある。

単元で育てたい資質・能力

- ・コミュニケーションを通して語彙を増やし、言葉のカテゴリーや属性などを理解し、使いこなす力
- ・慣れ親しんだ英語表現を駆使し、何とかしてコミュニケーションを図ろうとする力

単元について

これまで積み重ねてきた学習を土台にして、特に相手意識・目的意識をもたせることができる題材である。学習を通して、相手の好みを聞き出すことが人と人との関係づくりに役立つことを実感させることができると考えられる。

また、知っているつもり言葉の改め直して見直させることにより、日本語・英語についての見方・考え方を育み、言葉の使い手としての意識を高めることができる教材である。他者とやり取りしながら、コミュニケーション能力と言語能力の2つを身に付けさせていきたい。

単元で育む見方・考え方の
対話の中で、言葉と日本語の相互に
関連付けたり、外国語と日本語の
順の違いに着目したりすること。

手立て

- ・具体物を提示し、板書を作りながら行うデモンストレーション
- ・振り返りで気付いたことを共有・整理する場面

4 授業の実際

(1) 本時の目標

色や形など慣れ親しんだ表現を使い、欲しいものを尋ねたり伝えあったりする。

(2) 授業の概要

- 挨拶をする。
- 単元のゴールと本時のめあて、ポイントを確認する。
 - ㊦ グリーティングカードを作ろう。
 - ㊧ 友達とやり取りをし、相手の好みを聞き出そう。**【コミュニケーションのポイント】**
 - ① 情報を正確に聞き取る
 - ② 目を見る、うなづく
 - ③ はっきりと話す
- ALT と HRT のやり取りの例を聞く。

具体物を提示し、板書を作りながら行うデモンストレーション

※詳細は授業の考察(1)を参照
- 使用表現を確認する。
- ペアでやり取りをする。
 - ・互いの好みを尋ね合う
 - ・聞き取ったことをシートに整理する
- ポイントに沿って振り返りをする。

振り返りで気付いたことを共有・整理する

※詳細は授業の考察(2)を参照
- 挨拶をする。

評価：これまでに慣れ親しんだ表現を使い、欲しいものを尋ねたり伝え合ったりしている。

5 授業の考察

(1) 授業記録より

コミュニケーション活動に向けて、ALT と HRT によるデモンストレーションを示した。子供が実際に使用するインタビューシートと同形式の表を黒板に提示し、情報を整理する方法を示すとともに、話す際の語順も押さえた。(T1 : HRT, T2 : ALT)

T1 : Hello! I have some questions for you.

T2 : OK.

T1 : What shape do you want?

T2 : Circle, please.

T1 : I see. What color?

T2 : Yellow, please.

T1 ; OK. How many?

T2 : Five, please.

T1 : You want five yellow circles?

T2 : Exactly.

★★バットン先生に好みをたずね、メモしよう。

	数	色	形
①			
②			

★★★ペアで好みをたずね合おう。

	数	色	形
①			
②			
③			

上記のような手立てを取った目的は次の2点である。1点目は、子供のつまずきに対応するためである。これまでの表現活動の中で、母語の段階でも言葉とものがなかなか結び付かず、

主体的に発話することができない様子が見受けられたからである。使用表現を暗記してやり取りしたとしても、実際のを思い浮かべることができず、実感を伴ったコミュニケーションになっていないことがあるため、言葉とものを結び付ける一助となるようにした。

2点目は、語順を視覚的に捉えられるようにするためである。文法知識のない子供が英語を話すとき、指定された語数の文をひたすら暗記している様子が見られる。自分の考えや思いを込めて発話させるのであれば、話している事柄の意味を理解する必要がある。それを抜きにしては全く無味乾燥で機械的な応答で終わってしまう。意味のあるやり取りにするために、発話者自身が相手に何を伝えているのかを自覚することが大切なのである。また、本時で押さえたポイント以外の面で問題が生じることを避けるために（つまり子供が混乱しないようにするために）、質問をする際は敢えて逆の順序で話すようにさせた。例えば、「5 blue stars」を引き出すために、形・色・数の順序で質問させた。これは疑問詞の違いによる混乱を避けるための配慮でもある。ここでは‘what’と‘how’を用いるため、この二語が順不同で混在しないようにするために整理したのである。これにより、子供はシートを見ながら尋ねる内容を整理・構築し、互いにやり取りすることができた。意図的に作成した形式で相手から聞いた情報を整理し、簡潔にまとめることにより、3年生でも正しい表現でやり取りすることが可能になった。言語によるコミュニケーションであるから、ある程度の正確さは求められるべきである。聞き手にはあいまい耐性を育成しながらも、話し手には正確さを追求する態度を養うことは、母語を正しく使おうとする意識にもつながる。

(2) 子供の自己評価カードより

授業の導入で本時におけるコミュニケーションの観点を示し、それらを意識しながら活動に取り組みさせた。以下は、終末の振り返りにおいて見られた子供の記述である。

(括弧内は授業者による分析)

- ・相手のことが分かったし、自分の好みも言えた。(相手への理解、コミュニケーションの充実)
- ・ちゃんと話せた。(コミュニケーションに対する自信の増幅、正確さ)
- ・最初は分からなかったけれど、だんだん言えるようになった。(あいまい耐性の構築)
- ・相手の人がちゃんと聞いてくれた。(コミュニケーションの成立)
- ・相手の話を聞いて、相手のことが分かった。(コミュニケーションの意義を理解・実感)
- ・相手とじっくり話したことで、もっと仲良くなれた。(人間関係の構築)
- ・質問するだけではなく、みんなに紹介する言い方も分かった。(やり取りから全体発信へ)
- ・いろんな人とやり取りしてみたい。(コミュニケーション意欲の外向)
- ・すらすら聞いて嬉しかった。(スムーズな発話の実感、流暢さ)

記述内容から、子供は学習活動を通してコミュニケーションの意義を理解し、対話を成立させることの必要性を実感できたことが分かる。対話が成立したことで人間関係が構築され、いつしか自然な会話へと変化していることを子供が自覚したと捉えることができよう。

さらに、コミュニケーションを通して相手を理解することの大切さにも気づき、学級の友達以外の人とやり取りを望んだり、人前で発表することへの意欲を示したりする子供も見られた。

6 本実践の成果と課題

(1) 成果

本実践における成果は以下の2点である。1点目は、ワークシートや模範の示し方を工夫したことにより、思考の整理と表現を同時に可能にすることができたことである。活動の見本を子供に提示する際、形式的な説明で終わるのではなく、具体物を示し、板書を作りなが

らデモンストレーションを行ったところ、話す内容の構成が明確になり、話したい内容を正確な語順で発話することができた。

2点目は、活動と評価の観点を一致させたことにより、ゴールまでぶれることなく学習活動に取り組ませることができたことである。活動の最中には、観点に沿ってお互いにアドバイスし合う様子も見られた。

(2) 課題

一方で、以下のような課題が見られた。それは、テキストで扱われている語彙が当該学年における子供の生活経験と必ずしも結び付いていないという現状にあるということである。母語の段階でも語彙は思いの外少なく、言葉を聞いてもそれぞれのカテゴリーや実物を捉えきれないものが多い。子供は「英語 → 日本語 → イメージ → 英語による発話」の流れで発話していると考えられるが、イメージの段階でつまずきが見られ、英語による発話に到達しない子供が存在することが分かった。

言語を習得する過程でどこにつまずきがあるのかを詳細に分析し、まずは母語における意味の理解を確実にした上で外国語の発話へと移行する必要がある。今後は、内容面と言語面の両方で教科横断的な授業を展開し、子供の言語能力を高めていくことを目指していきたい。

(吉谷 瑞穂)

Ⅲ これまでの実践から明らかになったこと

1 成果

研究内容(1) 主体的な学びにつなげる場面の設定と語彙の選定において、教材提示やワークシートを工夫したことにより、子供がゴールまでの見通しをもって活動し、主体的な学びにつなげることができたことである。実践例1では、理由や説明を加えて複数の事柄を関連付けことの大切さに着目させることで、これまでの自分のスピーチを見直し、よりわかりやすいスピーチを目指していこうとする気持ちをもたせることができた。実践例2では、ワークシートや教師の模範の示し方を工夫したことにより、子供の思考を整理し、英語と日本語の語順等、3年生の子供にとって難しい内容であっても無理なく理解させ、スムーズな発話につなげることができた。

また、話すことにおいて、流暢さといった技能面だけでなく、よりよいスピーチのために内容面に着目させたり、相手のためにカードを作成するといった目的を設定したりしたことで、相手を意識したコミュニケーションにつなげることができた。

2 課題

語彙不足のため言葉のイメージがつかめない、自分の伝えたいことを日本語でイメージする段階で意味を変えずに英語の既習表現に置き換えられないため、英語による発話に到達しないという課題が、単元、学年を問わず見られた。また、興味のあることには深い知識をもつ子供が多いが、全体的に、国名、オリンピックの競技種目、地域にある施設名など、外国語の学習に必要な社会的な知識が不足していることも明らかになった。

これらの課題を解決し、主体的な学びにつなげるためには、教科横断的な学習を通して語彙や知識を増加させるとともに、自分の知っている言葉に置き換えるなどして何とか伝えようとする言語の方略的能力を高めていく必要がある。また、高学年になるにつれて、日本語と外国語の運用能力に大きな差が生じていく。子供がそれを理解せず、難しい日本語表現をそのまま英語に置き換えようとしていることも英語での発話につながらない原因の1つとなっている。子供に英語と日本語の運用能力の差を理解させたうえで話す内容を選択させていく指導も必要であると考えられる。

(田中 久絵)